

今英男が残した平成の首里城正殿復元資料

宮城 修

Shurijo Castle restoration materials left by Hideo Ima

Osamu MIYAGI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第15号別刷

2022 年3月31 日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15

March, 2022

今英男が残した平成の首里城正殿復元資料

宮城 修¹⁾

Shurijo Castle restoration materials left by Hideo Ima

Osamu MIYAGI¹⁾

Abstract

Shurijo Castle was restored in 1992. At the time, Hideo Ima from Ishikawa Prefecture was in charge of sculpture. The Karahafu he created is the face of Shurijo Castle, Kaerumata and Flame jewels, Dragons were decorated. Besides, he carved many Dragons and Lions.

Shurijo Castle disappeared in 2011, but the restored materials he left behind were donated Okinawa Prefectural Museum & Art Museums. From of many of these materials, I will clarify the state of restoration

はじめに

唐破風。かつては唐破豊とも書き、首里城正殿自体を示す言葉として用いられていたこともあった。唐破風は正殿の中でも最も目につく部分であり、その妻飾には火焰宝珠や大墓股、一对の金龍等が色鮮やかに装飾され、まさに正殿の「顔」というべき存在感を放っている。その唐破風妻飾の彫刻を1992(平成4)年の首里城復元の際に担当したのが、石川県出身の彫刻家、今英男氏(1937-2014)である。今氏は唐破風妻飾だけでなく、向拝部の金龍や、琉球国王の玉座である二階御差床の天井額木と内法額木等、多くの木彫に携わっていた。1990(平成2)年に二階御差床天井額木の制作から始まり、月毎に隙間なく決められた作業工程に基づき石川県と沖縄県を何度も往復しながら制作を進めていった。まさに時間との戦いのような状況だったのではないだろうか。本稿では、その制作過程の中で残した下絵や木型、試作品、図面、制作メモ等の資料を紹介するとともに、彫刻家であり職工でもある今氏の歩み等を、ご遺族の妻良子氏と当時の弟子であった二代目知田清雲氏より聞き取った内容と過去の取材記事等からまとめることとする。

1. 今英男氏の歩み

今氏は1937(昭和12)年、日中の対立が激しい旧満州(中国北東部)で出生した。5人兄弟の4番目で、姉2人に兄と妹がいた。戦後まもなく父親の出身である石川県金沢市に戻り、石川県立泉ヶ丘高等学校を卒業。その後、1956(昭和31)年に神戸日星電気に入社。1958(昭和33)年には関西テレビに入社し、無線のエンジニアとして仕事に励んでいた。しかし、翌59年に不慮の転落事故で脊髄を損傷し、下半身に麻痺が残ることになってしまった。良子氏によると若い頃は走り幅跳びの県記録をもっていたらしく、運動能力は優れていたと思われる。そのため、体が不自由になってしまったことに対し、大きなショックを受けたことは容易に考えられる。今氏が22歳の時であった。

体に大きな損傷を負った今氏は6年半に及ぶ療養生活を経て、1966(昭和41)年に富山県井波市(旧井波町)の社会福祉法人「マーシ園」で彫刻を学んだ。もともと木彫りが好きで、小さな木のブローチ等をよく作っていた。マーシ園では木彫科の山田紅雲指導員のもと技を磨いていった。1969(昭和44)年、32歳になる今氏は第十五回一陽会に「Torso」という作品を出品し初入選を果たしている。一陽会へ出品するようになったのは、実姉が一陽会の常連入

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

選者であったことだった。

今氏が彫刻を学んだ井波市は富山県の南西部にあり、豊富な木材に支えられた木工品等の生産がさかんな地域で、日本唯一の木彫刻専門の職業訓練校（井波木彫刻工芸高等職業訓練校）がある。井波彫刻の歴史は、足利義満の治世に建立された瑞泉寺（京都本願寺5代綽如上人が創設）が1763年に再建された際、京都本願寺から前川三四郎らの彫刻師が派遣され、その技術を地元の職人が受け継ぐようになったのが始まりとされている。

今氏は一陽会や日本海造型会議等に所属し、彫刻家として抽象彫刻の可能性を追求していく。展覧会へ作品を出品し、新たな挑戦を続けていた。論理的な思考をもち、作品を合理的かつ効率的に制作するために材料や道具の準備、作業の組み立てを綿密に考えていた。頭がとても切れる人物だったという。また、その傍らでは生計を立てるために欄間や仏壇、店舗の看板等の制作を請け負っていった。1989（平成元）年には石川県白山市にある吉野工芸の里に工房を開き、多くの作品を制作していく。今氏の自宅の作業机の上には、今でも約70本の彫刻刀や鑿等が所狭しと並べられており、道具への強いこだわりがうかがえる。今氏は購入した刃先を自分で削った柄と組み合わせてオリジナルの彫刻刀を作り、制作にあたっていた。細やかで曲線の多い彫りを施すには平刀数十種類、丸刀数十種類、角刀数十種類等といった具合に豊富な形状の刃先を揃えなければならない。作品の形態に応じて刃先が右や左へ曲がっている物など、細部に至るまで綺麗に彫ることができる道具の工夫があった。

また、今氏は後進の指導にも尽力している。1981（昭和56）年には知田清雲氏（現：二代目）を弟子受けする。知田氏が今氏に弟子入りしたのは、今氏と知田氏の父（初代：知田清雲）が知り合いで、また知田氏の叔父（初代清雲の兄弟）が先に今氏に弟子入りしていた縁があった。19歳の時に弟子入りの知田氏は、後に今氏と共に首里城正殿の復元作業にも携わるようになる。現在は二代目知田清雲として、石川県唯一の獅子頭専門工房を設け、獅子頭の制作・修復・復元等を行っている。特に獅子頭の修復は定評があり、全国から多数の依頼を受けている。

2. 今英男氏の首里城復元作業

沖縄戦で失われた首里城の復元を、国営公園事業として整備することが閣議決定されたのは1986（昭和61）年であった。その後、1992（平成4）年の沖縄本土復帰20周年記念事業として首里城公園がオープンされるまでの間、急ピッチで設計・木材調達・工事が進められた。正殿の設計には約3年を要し、本体工事は、1990（平成2）年から1992（平成4）年の約3年半を費やした。

今氏が復元作業に携わるようになったのは、藤田社寺建設株式会社からの依頼を受けたからである。福井県にある藤田社寺建設は社寺仏閣の設計施工を主な業務としており、当時、付き合いのあった今氏の確かな腕と彫刻への造詣を見込んで首里城の復元作業を依頼したという。知田氏によると「先生にとって首里城復元は一番大きな仕事だった」といい、彫刻家としての技量を存分に発揮する機会となった。

平成2年8月21日付の木彫刻工程表及び木彫刻リストでは、今氏が担当する箇所作業スケジュールが記載されている。平成2年7月の二階御差床天井額木に始まり、内法額木、高欄龍柱、高欄羽目板、斗束、向拝妻飾り、牡丹に唐草、獅子、金龍、透かし欄間、懸魚と平成3年12月まで、月毎に代わる作業をこなしていった。（注1）作業は自宅の作業場と吉野工芸の里にある工房または現地で行い、約3年の間に何度も石川県と沖縄県を行き来した。最後は現地に約1ヶ月滞在し、作業にあたったという。良子氏によれば「朝早くから夜遅くまで作業し、土日も仕事をしていた」といい、知田氏はとにかく作業が沢山あり、「納期に間に合わせなければならない」と今氏がいつも言っていたと話している。また、平成3年7月13日付の木工事工程表には詳細のスケジュールが記載されている。これを9月21日付の木彫刻の打合せメモ（今、西村、知田、村田、山本）と照らし合わせると、ほぼスケジュール通りに作業が進んでいることがうかがえる。今氏が納期に間に合わせるために昼夜励んでいたことは容易に想像できるが、これまで作品を合理的かつ効率的に制作していた彫刻家としての経験がそれを可能にしたのではないだろうか。それでも、復元作業には人手を要した。弟子の知田氏は二階御差床額木等の龍の鱗を彫り、先述した知田氏の父と叔父も応援に加わ

り、復元作業を進めていく。限られた時間の中での復元作業だった。

3. 今英男氏が残した復元資料

2019（令和元）年10月31日未明、首里城正殿と主要な施設が焼失した。このニュースに誰もが耳を疑っただろう。平成の首里城は琉球王国時代の歴史・文化の素晴らしさを伝える象徴として、また観光立県沖縄の目玉として大きな役割を果たしてきた。その焼失に県内に限らず、県外や海外など多くの人々が深い悲しみにふけた。今氏の資料を寄贈して頂いた良子氏も、その一人である。良子氏は自宅で大切に保管されている首里城復元の資料を、新たな首里城復興に役立ててほしいと願い、寄贈することを決断した。2022（令和4）年10月より首里城正殿の工事が着手される予定になっているが、平成の首里城復元を契機にこれまで蓄積・承継された技術や資料が活用させることを期待したい。ここでは、今氏が平成の首里城復元の際に残した多くの資料を紹介していくこととする。

1) 下絵原本

・二階御差床天井額木珠取双龍文

260 H×1500 Wの用紙に鉛筆で描かれた下絵。裏には「平成2年4月16日完成（西村貞雄）」と書かれている。当時、琉球大学教授の西村氏は首里城正殿実施設計委員会の彫刻部会に属し、石彫・木彫・陶芸の総括を担った。今氏とは手紙や制作メモのやり取り、現場での調整等を通して交流を深めた。西村氏は彫刻分野の多くの下絵を作成するにあたり、『国宝建造物沖縄神社拝殿図』や『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』等の文献資料、鎌倉芳太郎等が撮影した古写真、あるいは現存する類似資料等を参考にし「決してオリジナルのものではなく根拠（資料）に基づいて下絵を描いた」と話している。また、二階御差床内法額木（右側・中央・左側）、唐破風妻飾（大墓股・阿形と吽形の降龍）、向拝透かし欄間（牡丹唐草と獅子）の下絵原本は西村氏が所有していることが確認できた。

2) 今氏が描いた下絵

良子氏によると「夫は絵も字も上手」であり、自

宅の作業部屋には今氏が描いた人物画や仏の絵が掲示されている。知田氏も同様に「先生は彫刻の前には必ず下絵を書き、作業の時には常に下絵を手元に置いて彫っていた」と話している。以下の珠取双龍文と獅子図がそのままの図案通りに彫られることは実際にはないものの、龍や獅子といった動きのあるものをどのように表現していくのかというイメージを膨らませていったのではないだろうか。

・珠取双龍文

470 H×4200 Wの和紙に墨で描かれた下絵。西村氏の描いた下絵原本と同様のことから二階御差床天井額木の珠取双龍文と思われる。「平成二年五月首里城」と記載され、下絵原本を受け取った後に描いている。実際の首里城の珠取双龍文は金色の龍、金色の火焰宝珠、赤・青・緑・黄・白を基調とした瑞雲で構成されているのに対し、今氏のそれは龍の鬣・角・髭・鱗・毛房が金色で胴体は緑、火焰宝珠は宝珠が金色で火焰は赤、瑞雲は灰色を基調に赤・青で彩色されている。また、西村氏の描いた下絵原本と大きく異なる点として、龍の腹板を描いている事である。腹板を描くことでより立体的に表現している。彩色の工夫や下絵原本にない腹板を描くことで、より写実的に表現しようと試みた点がうかがえる。



写真 1. 珠取双龍文の一部

・獅子図

930 H×1080 Wの和紙に墨で描かれた下絵。「首里城獅子図」と記載され、「英」と思われる落款が確認できる。正殿には高欄親柱に12体の獅子や降棟に阿形と吽形の獅子が据え付けられており、木彫としては向拝上部の左右に阿形と吽形の獅子、向拝桁部に牡丹唐草と獅子をあしらった透かし欄間がある。今氏の描いた獅子図と首里城向拝部の獅子を見比べると形態が異なっていることが分かり、更に旧

円覚寺の板戸唐獅子浮彫の阿形と似ていることが分かる。実際、西村氏も『首里城正殿実施計画（彫刻）報告書』の中で旧円覚寺板戸唐獅子浮彫を参考にしたと述べており、今氏が旧円覚寺の資料を基に描いたと推測できる。顔と肢体は青、鬘・毛房・尻尾は緑で彩色され、見開いた目に大きく開けた口は何かを威嚇しているような迫力のある表情である。



写真 2. 獅子図

3) 図面の原寸大コピー

・二階御差床天井額木

600H×3800Wのサイズ。

・二階御差床右側内法額木

600H×3500Wのサイズ。「平成2年9月 西村貞雄」の表記。阿形の右前脚の鱗の向きが逆になっているため「×」の朱書き。また、吽形の右前脚と右後脚の指の形態に不自然さを感じているためか、正確な指の輪郭線を描こうと試みている。額木の右端の瑞雲が端まで描かれているため、間の空白を確保するため「左へ寄せる」と2つの瑞雲に朱書き。また、右側内法額木と中央内法額木の接合部では、瑞雲からでるしっぽのような流れを中央額木のそれとずらすためか「となり[ママ]との関係に注意」と書かれている。

・二階御差床中央内法額木

600H×4500Wのサイズ。「平成2年8月 西村貞雄」の表記。図面に描かれた阿形の右前脚の毛房が額木に収まっていないため、右前脚に矢印を向け「全体的に少し上げる」と朱書き。また、額木の下

端まで龍が描かれ、間がないことに対し「この部分がきゅうくつ[ママ]」と朱書きされている。更に、右前脚の鱗の向きが逆であることを指摘。上記と同様に、吽形の左前脚の毛房が額木から少しはみ出ているため、左前脚に矢印を向け「全体的に少し上げる」と朱書き。そして、中央内法額木と右側内法額木の接合部では、瑞雲が右側内法額木にかかるため「左に寄せる」と書かれている。

4) 図面に書かれた制作メモ

下記のメモはA3用紙2枚ずつあり、1枚目には今氏が気になった点が朱書きされ、2枚目にはそれに対する回答が書かれている。

・二階御差床右側内法額木（阿形）

阿形の左前脚付近の胴体の厚みが不足している部分に対し「欠落か?」と指摘。これに対し「[寸法記]にはない!」の回答。左前脚の指の形態に対しては「不自然な気がする」と書かれているが、回答は見当たらない。また、回答メモには胴体の輪郭線が大きく修正され、「胴体で調整して下さい」と朱書きされている。実際の阿形は図案通りに彫刻されており、どのような経緯で輪郭線が修正されようとしたのかは不明である。

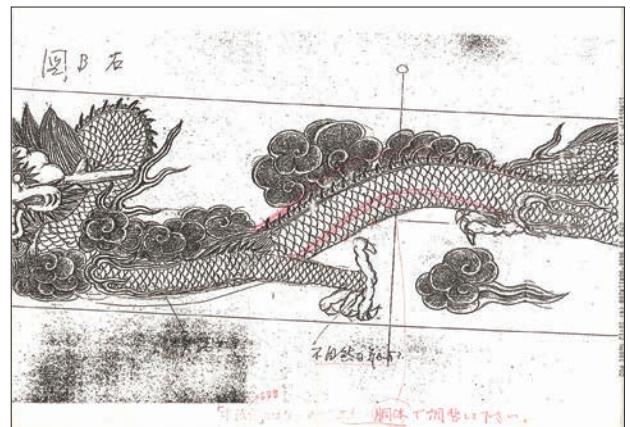


写真 3. 制作メモ（二階御差床右側内法額木）

・二階御差床中央内法額木（吽形）

上記と同様に、胴体の厚みと指の形態を指摘している。胴体の厚みに対しては「[中央左]の龍も同様にふくらます[ママ]」、指の形態に対しては「うでにかくれる[ママ]」部分があることの回答。また、角が片方しか描かれていないことに対し「ツノ[ママ]は片方が裏側へあると考えられるのでこのまま」

という今氏のコメントに対し、「OK」の回答がみられる。

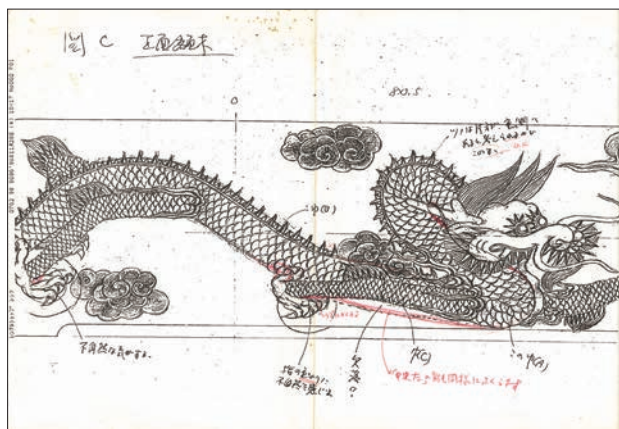


写真4. 制作メモ（二階御差床中央内法額木）

・二階御差床左側内法額木（阿形）

上記2つと同様に胴体の厚みの指摘している。それに対しては「天井額木に準ずる」の回答がある。また、龍の頸の後ろの胴体が大きく曲がっている部分の「空間が必要でないか？」に対して、「空間を設ける」の回答。他にも「雲のカド[ママ]面取りは欠けやすいので、少し取ってあるが、今度は出来るだけ面を小さくします」や「わずかの部分が強張[ママ]されて不自然に感じたので、どんなすべきか？」「図案に忠実に彫るを原則とするも、補充部分は、今のところ残してあるのでどんなにすべきか？」というコメントが残されている。また、回答メモには「顔面は大きいと思われるので少し小さくして下さい」とある。だが、実際に顔面が少し小さく彫られたのかは明確には判断できない。

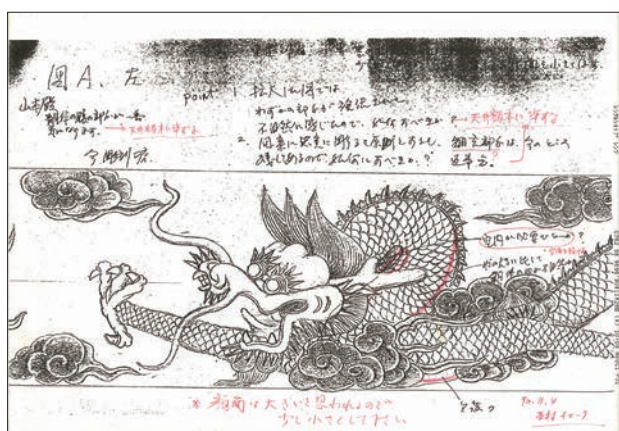


写真5. 制作メモ（二階御差床左側内法額木）

このメモには、「山本殿」の宛名で「胴体の腹の部

分が一番気になります」と書かれており、「90,11,4 西村チェック」とあるので、これら一連のメモは今氏から山本氏に宛てられ、その内容を西村氏が確認し回答したものだと考えられる。後述する原寸大木型でふれるが、西村氏が描いた下絵原本と異なる点については今氏が西村氏からきちんと確認をとって修正していたことが分かる。

5) 原寸大木型

原寸大の図面を基に切り出された木型。どのような工程で木型が作られたのかを知田氏に確認してみると、彫りをする前に余分な部材をドリルで切り取る作業があり、図面に穴を空けるわけにもいかなないので木型を使うことがあるという。しかし、木材に図案の輪郭線を描くことがあるため、配置の微調整をするために木型を用いていたのではないかと話していた。

・二階御差床天井額木珠取双龍文（阿形のみ）

2枚の木型から成り、尾の部分がな。図面の原寸大コピーと重ね合わせると、龍の脚の付近にある瑞雲が上に寄せられているのが分かる。制作メモ等から、額木の縦幅いっぱいに図案が描かれていることから、間の余裕を持たせるために瑞雲を上寄せたと思われる。

・二階御差床右側内法額木珠取双龍文

阿形と咩形ともに3枚の木型から成り、それぞれ尾の部分がな。火焰のない宝珠がある。阿形の木型は龍や瑞雲が描かれている。阿形の胴体部に赤字で「注」と書かれているが、制作メモ等からはどのような注意を要したのか明らかにすることはできなかった。また、4)の制作メモ等で龍の胴体の厚みが不足している点を指摘しており、木型ではその部分を補っているのが分かる。咩形の木型にも龍や瑞雲が描かれており、阿形と同様に胴体の厚みを補っている部分があることが分かる。

・二階御差床中央内法額木珠取双龍文

阿形と咩形ともに3枚の木型から成り、それぞれ龍の全体が残っている。火焰のない宝珠がある。図面の原寸大コピー通りに木型が取られている。

・二階御差床左側内法額木珠取双龍文

阿形と咩形ともに3枚の木型から成り、それぞれ尾の部分がな。火焰のない宝珠と咩形側の瑞雲2

枚が残る。阿形の木型は龍の顔が簡易的に描かれている。吽形の木型には右前脚付近に瑞雲が1つ描かれ、その横に「セッコウ[ママ]の雲を見て彫る 縁を残す」と書かれている。また、胴体の中央から尾にかけて「□□□□外□図を□□□□図面参照」「みて下さい」「瀬戸①～□」と書かれているが、判読できない文字が多く意図を明らかにすることができなかった。

6) 試作品

・珠取双龍文の吽形

750H×2240Wの板に龍の吽形と火焰宝珠の木型を貼り付けている。下絵原本や図面の原寸大コピーから二階御差床天井額木の珠取双龍文と思われる。また、5)の二階御差床天井額木の珠取双龍文が阿形しか残っていないことから、吽形はこの試作品として残したのではないかと推測できる。龍の木型は白く塗られ、その上に鉛筆で龍が描かれている。火焰宝珠は宝珠が白、火焰が赤色で彩色されている。同様に、胴体に巻き付く火焰も赤色である。下絵原本と比べて瑞雲の配置が異なり、大きい瑞雲が増えている。また、火焰宝珠は太陽の様に上部に配置されている。火焰宝珠と瑞雲の配置も下絵原本とは異なりその意図は分からないが、良子氏は「遊び感覚で作っていたのではないかと話していた。仮にそうだとすると、2)の下絵同様、龍の彫刻に向き合う今氏が珠取双龍文に対するイメージを広げたり深めたりするために制作していったのではないだろうか。



写真 6. 試作品の一部

7) 唐破風妻飾の原寸大図面

西村氏が描いた下絵原本等を基に、鉛筆で輪郭線

を描いた図面。

・大墓股 1550H×4000Wのサイズ。

・降龍の阿形

1500H×3150Wのサイズ。龍の頸の後ろの胴体が大きく曲がる部分で背鰭が向かい合うため、「背のトゲCHECK」と書かれている。棘と鰭の区別を明確にするためなのだろうか。

・降龍の吽形 1500H×3150Wのサイズ。

8) 打合せメモ

9月21日付の木彫刻の打合せメモから、作業スケジュールの確認や各彫刻について具体的な調整が行われていたことが分かる。その内容から平成3年と推測され、打合せに参加したのは今氏、西村氏、知田氏、村田氏、山本氏となっている。二階御差床天井額木の龍について「目線をはっきりさせる」「瞳に線彫りを行う」「眉間の盛り上がりの天端を右より[ママ]にする(阿形は)左寄り」の他、宝珠の上部を「彫り込んで宝珠をはっきりさせる」とあり、具体的な彫り方の確認が行われている。獅子については円覚寺の獅子は日本的であるのに対し正殿のそれは独特であるとし、今氏は「正殿の獅子はヨーロッパ的」「背中に巻き毛がある ライオンにもある」とコメントしている。唐破風妻飾については、宝珠の線を一本加えることや大墓股の内側(火焰宝珠側)に向かって削る調整が行われ、大墓股の外側と内側の厚みが違うことを確認している。これについては、平成3年7月に今氏が西村氏に宛てた手紙でも、妻飾の彫刻に対し「平面的で見にくい」と彫[ママ]の効果が少なくなるとされます。彫全体を前傾にしますと効果的だと思います。」とあり、同様の記述がみられる。



写真 7. 制作中の唐破風妻飾

4. おわりに

1990（平成2）年から始まった復元作業。今氏が彫った多くの木彫刻は、その後色鮮やかに彩色され、首里城正殿に壮麗さを醸し出した。首里城を取り上げた出版物や各種メディア等の写真や映像には必ずと言っていいほど、今氏が彫った唐破風妻飾や金龍、珠取双龍文等が紹介されている。今氏は多くの人々に彫刻を観てもらう機会を得、大きな充実感や達成感を感じていたのではないだろうか。

今氏はかつて雑誌の取材の中で、形や構造を考える『コンセプト』を強調している。下絵原本に描かれた龍の胴体や指等の不自然さを感じていたのも、モノの形態や構造を常に重視していたからではないだろうか。どのように彫ればより龍らしくなるのか、どのように彫ればより効果的なのかを追究しながら復元作業を進めていったのだろう。また、首里城正殿の中で手掛けた多くの木彫品はどれも数mに及ぶものだった。細かな部分に細心の注意を払いつつ、全体的なバランスや見る角度も考慮し作りあげている。

今氏が平成の首里城復元作業で制作した数多くの木彫品は、残念ながら今ではもう見るできない。今回の資料調査を通して今氏の熱意等にふれ、実物を見たくなったという気持ちが強くわいた。令和4年1月19日から3月6日の会期で沖縄県立博物館・美術館常設展示歴史部門展示室特集展「平成の首里城復元－彫刻家・今英男－」を開催したが、観覧した方々の中にもそう感じた方がいらっしまった。平成の首里城正殿が焼失し今氏が制作した木彫品が失われてしまった現在、自宅に残されていた数多くの復元資料は今氏の足跡を辿る貴重な資料である。



写真 8. 展示風景

残された多くの資料を通して、今氏の高い技術と、彫刻家としての信念や気概のようなものが、首里城正殿の素晴らしい木彫品をうみ出したのだと確信した。

5. 謝辞

本稿をまとめるにあたり、彫刻家としての今氏の人となりや魅力等を石川県立歴史博物館の鶴野俊哉氏からご教示を賜った。また、復元作業時の様子を知田清雲氏と西村貞雄氏からご教示いただいた。特に、西村氏からは今氏の復元資料や首里城正殿彫刻の詳細についてご指導を賜った。皆様に心よりお礼申し上げます。

そして、形見ともいふべき貴重な資料を寄贈していただいた妻良子様に深く感謝申し上げます。

註釈

註1：沖縄総合事務局が作成した平成元年度首里城復元に向けた技術検討委員会 第1回彩色・彫刻ワーキンググループ会議の資料2では、平成の復元時における木彫刻の概要が示され、唐破風妻飾、向拝の金龍、天井額木・内法額木などは石川県在住の彫刻師が制作、向拝の透し欄間・牡丹に唐草・獅子、御差床須弥壇・高欄・龍柱、六葉、懸魚などは台湾の彫刻会社が制作とされている。

参考文献

若林純『寺社の装飾彫刻宮彫り―壮麗なる超絶技巧を訪ねて―』2012年 日貿出版社
(財)海洋博覧会記念公園管理財団『首里城の復元～正殿復元の考え方・根拠を中心に～』2003年
沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所『首里城正殿実施設計（彫刻）報告書』1994年

